

KTK ひゅうまん 京都

No 550 2022年9月号

編集/京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者/池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P 1 左大文字 つどめ
- P 2 常任委員会から 池添 素
- P 3 入院の記 松本 美津男
- P 4 血の染みついたパトシ 中村 暁
- P 5 電動車いす「まんまる号」ドライバー日記 山本耕平
- P 6 ジョニーの炸裂日記 ライスチョウジョナ
- P 7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P 8 2+2=詩 富士一文
- P 9 障害のある人の権利を守る北障連から 濱中 博
- P 10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P 11 知っ得情報 松本 美津男
- P 12 井上吉郎さんを偲ぶ 鈴木 勉

左大文字

私が地域福祉の現場から大学に籍を移したのは2001年4月だから、もう21年も前のことになる。キャンパスの慣れぬ環境に戸惑いながら、「らく相談室」にあった京障連にせつせと足を運んでいた。全国から届く障害者運動の資料漁りが目当てだった▲その頃、京障連では機関誌の刷新を手掛けていて、私も幾度かその場面に立ち会うことがあった。記憶も朧気だが、「ひゅうまん京都」という名称もこの「左大文字」もなかった。紙面の定型化が話題になって、あれやこれやとフリートークが始まった▲私も見聞きしてきた学生エピソードを話題にした。彼らの中で流行っていたことに、ボランティアのようなアルバイトがあった。安上がりに搾取されるバイトの意味ではなく、自分のためになって少しお金にもなる、というポジティブ感覚。ボラバイトといった。こんな話をしたら、その場には編集長が、それがいい、そんなコラムにしよう、と言い出した▲朝日には「天声人語」があり赤旗にも「潮流」がある。京障連の機関紙も毎号の紙面にその時々のおトレンドをテーマにしたコラムがあってもいい、というものだった。そして私が書くはめになった。天声人語や潮流には面食らったが、有無をいわせなかった剛腕の編集長は井上吉郎さん。その前年に市長選挙3回目を終えていた▲2002年4・5月合併号から連載が始まったコラムはその後「左大文字」となり、もう丸20年。井上さんも亡き人となった。合掌。

つどめ



「赤かぶら」
渡辺あふる

常任委員会から

〈編集長不在〉

7月号、8月号と体調不良な編集長不在のまま発行してきた。今回を乗り切れば次は何とかなどとのんきなことだったが、8月21日に亡くなった。編集長は編集だけではなく、原稿に穴が開いたらそこを埋める原稿をいろんなペンネームで書き、原稿を直すことも、書き手をお願いくることも、何役も担ってきたから不在は痛い。

描いたウインドブレーカーをプレゼントした。京都の原告は9名で、そのみんなの想いを直接届けることもした。悪法であった、障害者自立支援法はそのあまりのひどさに、障害者団体や障害種別の壁を越えて、京都でも大きな障害者運動のうねりを作ることができた。そのつながりの中で、『ひゅまん京都』の筆者に矢吹文敏さんに登場いただくことができ

京都』をしつかりとチェックして、ご意見していただき、一層充実した内容で届けられるように、がんばらなければならないと思うけれど、心細さはぬぐえない。

池添素(京障連事務局長)

さらに編集長は障害当事者として、障害者運動をけん引してきた役割も大きい。とりわけ障害者自立支援法訴訟の原告という立場で、国を相手に闘ってきた軌跡はみんなを励ましてきた。国との和解のときには首相官邸に出かけ、当時の首相だった鳩山さんに、9羽の折り鶴を

できる。京障連の組織は小さくて力も弱いけれど、毎月必ず発行する『ひゅまん京都』の存在は大きい。障害者問題にかかわる人たちが、それぞれの切り口で、様々な人生模様が描かれている。それも硬い理屈ではなく、経験や実感を通して語られているところが特長。原稿を丁寧

た。編集長の筆者探しの中で一番うれしかったことだったので、少し先に不在になった先輩の矢吹さんのことは、編集長と話していたことを思い出す。この世じゃない場所では二人が出会ったら、どんな話をしているのだろうか。厳しいエックがされていることは想像

今は、筆者の皆さんの協力と、皆さんの原稿を印刷できるまでに編集を担当してくれている安藤さんと、印刷や紙おり、発送の全てを担ってくれている河野さんとで何とか9月号も送り出すことができた。きつと編集長にはいろいろダメだしされそうなどころもあると思うが、そこは目をつぶっていただきたい。これからは、編集長にかわって、読者のみなさんが、『ひゅまん



入院の記 (3)

入院後渡された1日のスケジ

ュール表では6時起床、8時朝食、10時検温、12時昼食、18時夕食、22時消灯で、10時から16時頃までの間に検査・治療・回診など、となっていました。

夜更かし生活が続いていたものにとつては厳しいなと感じましたが、朝6時に一斉に起こされるわけではないので実際には7時頃に起床していました。消灯後もスマホでメールチェックやニュース、Facebookを読んだり投稿したりして12時前ぐらいに寝るというスタイルになりました。

昼は毎日若いPT(理学療法士)さんに短時間のリハビリ訓練を受けていました。

入院に必要な持参品リストを見て驚いたのは、ゴミ箱がそのリストに入っていたことです。

どうせ大したゴミも出さないだろうからと考えて、ゴミ箱代わりにレジ袋をベッドの端にぶら下げておきました。

紙おむつのことでは、看護師さんから、一枚310円のテープで剥がせるタイプのものを使うと言われ、思わず普通の紙おむつにしてもらえませんかと尋ねたら、「手術直後はこのタイプでないといけないです」と。体をあまり動かさずに履き替えできるからのようなので仕方ないなと思いましたが、数日後には我が家にあつたパンツ式紙おむつを使うことを認めてもらいました。

病院の食事で事実上の入院初心者にとつて驚きだったのは、夕食は午後6時に暖かい状態で配膳されることでした。

施設や病院の食事はお腹のすかないような時間に冷えたものが出てくるというようなことを聞いていたからです。

この食事に関して時間もあつたのでFacebookで、よく食レポ投稿をしていました。

例えば次のように。

12月22日

本日の病院食。

朝食に出たミニオムレツに添えてある蒸し(ゆで?)きざみキャベツの味がせず、食器回収に來られた看護師さんに尋ねたら、「皆さん味付けされてないようですね。マヨネーズかケチャップをかけてあげればいいのにねえ」と。

超薄味だったのかも知れませんがちよつと残念。

後は大体美味しくいただけ、病院食にしては(失礼)ご飯が結構美味しかったです。

12月23日

今日の病院の昼食。

井の蓋を開けたら?

お二段構え。

新鮮さを保つ工夫でしょうか。美味しくいただきました。

新型コロナウイルスに関わつて一度抗原検査を受けました。喉が渴いていて指示されたほど唾液がでず苦労しました。

同室の若者がしきりに外へ出たいと看護師さんに訴えるのですが、「もつと軽症で元気な人も感染予防のために外出が認められてないのでダメです」と言われ、しよげていました。

家族とも面会できず、なかなか厳しい状況でした。

松本美津男(京障連代表委員)



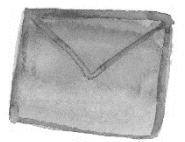
血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

② 血染めのバトンを握って

どうしてか、井上吉郎さんに目をかけてもらって、決して短くない期間、折に触れてお話をさせてもらったり、一緒に運動をつくったりしてきた。この連載も、井上さんから「何でもいから医療のこ

うとを連載しないか」と言ってもらい、書き始めたものだ。第1回が掲載されたとき、私の肩書が「医療ジャーナリスト」になっていて、びっくりした。私は原稿には特に肩書を書いていなかったの、吉郎さんが考えてつけてくれたのだろう。本当はいつかのタイミングで、「僕はどうか考えなくてもジャーナリストではありません」「僕はそんな立派な人もいないから12年前だと思



こうと思う。

「何でもいから医療のこ」と言ってもらい、書き始めたものだ。第1回が掲載されたとき、私の肩書が「医療ジャーナリスト」になっていて、びっくりした。私は原稿には特に肩書を書いていなかったの、吉郎さんが考えてつけてくれたのだろう。本当はいつかのタイミングで、「僕はどうか考えなくてもジャーナリストではありません」「僕はそんな立派な人もいないから12年前だと思

う。井上さんのお部屋に初めて伺い、何かを2人で話したことがあった。内容は忘れてしまったが、何か運動の相談だったか。その時間、私は吉郎さんに父を感じていた。そのことだけはよく覚えてい

何かを書くとき、話すとき、表現するとき、いつも吉郎さんに見てほしい、喜んでほしい、褒めてほしいと、ずっと思っていた。それが「父なる者」の意味である。そんな風に思う相手は、他にいない。この連載も、吉郎さんが最初の読者だと思つて、吉郎さんへの手紙のように書いてきたのかも。井上吉郎さんに読んでもらう気持ちで、書いてい

たこの国では今日も新型コロナウイルス感染症の第7波が収まらない。数字の上では新規陽性者数こそ減少傾向だが、死亡者数が多い。京都府でも直近1週間（9月1日～7日）、死亡者が報告されなかった日はない。感染症対策は亡くなる人を0にすることを目標にすべきだろう。国は全数把握の見直しや行動制限の期間短縮といった「緩和」策ばかりを打ち出している。「緩和」するなら確実な「治療の保障」が必要だ。だが相変わらず、入院できれば生きられたはずの人たちが高齢者施設に留め置かれて命を落とす事態が続いている。腹も立つし、無力感もある。でも「微力かもしれないが、無力ではない」という言葉を噛みしめながら、血染めのバトンを握ってまだしばらく走り続けていけたら、と思つている。

電動車いす「まんまる」 ドライバー日記 ⑤

山本耕平

町役場でのやりとりは、それだけでありません。公務員は、必ず、当事者の願いがかなわかった時のことを伝える傾向があります。

「あなたが、介護認定を申請しても、必ず認定されるとは限りません。それに、要支援と認められても、先生（医師）の診断書やケアマネージャーさんの意見で、電動くるま椅子が必要ないと言われることもありま

す」
「そうですか。その時は、障害者の補装具として活用できませよね」

役場の担当者は、ここでもなかなか認めようとしません。
「いや、いちがいにそうだと

はいえませんが、今、杖をおつきになって歩いているのですから」

これは、間違った知識や対応ではありません。ただ、果たしてどうでしょうか。この時のやりとりを大学の授業で紹介し、「ええんかな、こんなんでと思うのだけど、みんなどう？」と問いかけたのです。

学生たちからは、「なんか教科書的です」その人は、共感しながら聞けないですか」とさま

ざまな怒りを示しました。「何時までもなくささないで欲しい、その思いを」と思いながら、その学生の発言を聞きました。

さらに、その時、役場職員のひどい発言は続きました。「（身体障害者手帳2級が）認められるとい

いですね。医療費の自己負担がなくなったり、NHKの受信料を半額にしてもらえるんですよ。あれ、高いからいいですよね」といった発言です。「なんです。しかも、もらえてるってなんですか！」

と、私は爆発しそうになりましたが、この職員に怒りをぶつけてもなにも解決しません。その職員が歩んできた今までの人生が、そうした考えを形成してきた社会であり、そこで、そうした教育が展開されていたことこそが問題なのです。

社会の諸課題や矛盾に対する

怒りは、年代を超え、それに向かう粘り強さや優しさを生み出します。誰かに勝ち、誰かを出し抜くことが第一と考える社会では、自分のことを守りぬく

ことが大切と考え、その怒りが育

ちがたいのではないのでしょうか。



ジョニーの炸裂日記9

ライスチヨウジョナ(イラストレーター)

ひゆうまん京都の編集や連載もされていた井上吉郎さんが先日お亡くなりになられた。

私自身、井上さんとは特別関係が深かったわけではないが、私の5年間にも及ぶ特例補装具裁判では何回も傍聴に来ていただき、多大なるお力をお貸しいただいたのは感謝してもしきれない。

毎回裁判の後には、傍聴に来てくださった方々を交え、当日の内容をわかりやすく説明したり、情報交換をしたりといった報告集会というものが行われていた。裁判から1年ほど経った頃、傍聴に来てくれた井上さんから、報告集会の中である問題提起がなされた。

「この裁判をもっと多くの人に広め、傍聴者を増やしてい

対する恐怖が当初の強い気持ちを上回ってしまったのだ。井上さんには、まさにそれを鋭く見抜かれてしまったというわけである。

冷や汗をかきながら、どう上手いこと言い訳をしようかという悪い考えが一瞬よぎったりもしたが、どうせそんな言い訳も見抜かれてしまうに違いないと観念し、自分の正直な心情を全て話すことにした。私の言葉を聞き、その場におられた方々から沢山の応援の言葉をいただき、そのおかげで、これからは必ず広報にも力を入れるよう努力することを決意できた。

井上さんはいつも人を奮い立たせるような力強い言葉の数々を述べられるが、私の言葉を聞いた井上さんは、その一度だけ、いつもとは違う静かなトーンで、「プライドだけではやっていけない時もある」とおっしゃったことが今でも強く印象に残っている。これはプライドではなく、自分の弱さだとずっと思っていたのだが、果たしてプライドなのだろうか。「喧嘩好きな障害者だと世間に思われたくない」。確かにプライドと言えばプライドだ。ともすれば、弱さとプライドは表裏一体、本質は同じなのかもしれない。井上さんだからその言葉のように思えてならない。ともかくとして、井上さんが問題提起してくれたおかげで本格的に裁判が始まったと言っても過言ではない。

その4年後、勝訴した判決の日には、「これはジョナ判決とも言える大きな出来事」と言ってくれたことは、自分の誇りにもなっている忘れられない一言である。

つれづれあらぐち

場面③ 駅に向かう途中で、 身近な倫理の問いに出会う

あらぐち福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

法人内での新型コロナウイルス感染症拡大の対応がようやく一段落し、いつもより早く仕事を切り上げて予約したワクチン接種に向かっていた時のこと。駅の方へ歩いてみると、スイミングスクールの隣・洋食屋さんの前で白いものが動いています。驚いて身構えていると、高齢男性が仰向けになっていました。様子を見ていると、「おいー」と声が聞こえます。近くに知り合いがいるのかと思いきや、周りを見ましたがそれらしい人はいません。

立ち去るわけにもいかず近づくと「も勇気がいり、少し遠くで行ったり来たりしていました。」すると、通りがかった男の人が「大丈夫ですか」と声をかけて起こそうとしていたので、とっさに「手伝います」と駆け寄りました。2人でなんとか起きてもらおうとするのですが、足に力が入らないようです。ご本人から「手を持って」と言われて支えるのですが、なかなか立ち上がれません。転倒されたようで腕に擦り傷がありました。他に怪我はなく救急車も必要ないとのこと。

どうしたらいいか考えて、ご本人から自宅の電話番号を聞いて自分の携帯でかけました。動揺して番号を1回で覚えられず、また操作に慣れていないので番号がうまく押せず、聞き直しながらかやちと電話をかけられました。ご家族が出たので事情を説明し、場所を言ったところ「スイミング」なのに「天満宮」で伝わってしまいます。3回くらい繰り返した後、「何て言ったらいいんやろ」と周りを見渡して目に入ったスーパーの名前を伝えると、「近くなのですべいきます」の返事でした。

高齢男性に「もうすぐ来られますよ」と声をかけながら待つと、杖をついた女性がやってきました。自転車で出かけたものの戻ってこないで、1時間ほど前から子どもさんが車で探し回っているということでした（自転車は10メートルほど離れた民家の前に停まっています）。「危ないからと止めたのに出かけてしまつて…」と繰り返すご家族。

そんなやとりをしていると通りがかった人が「どうしましたか」と加わり、子どもさんの車が到着した時には誘導してくれました。5人がかりで介助して車へ、倒れていた時の状況を伝えてその場を後にしました。自分も含めた通りがかりの3人は、「おつかれ様でした」「ありがとうございました」と挨拶してそれぞれの行き先へ。自分の倫理観と決断の難しさを感じた出来事でした。

2+2 詩

「ある花の一生」

芽吹いたばかりの小さな双葉
口のするのは愚痴ばかり
雨に叩かれ猫に踏まれて
小さな芽なんてろくな事がない
早く大きくなりたいものだ

大きくなった緑の若草
今日も延々ぼやいてばかり
みんながみんな口を揃えて
花はまだかとうるさいうるさい
早く咲かせて黙らせたいよ

きれいな花は咲いたけど
花は黙らずぶつくさぶつくさ
虫だの人だの寄ってきて
ちやほやベタベタ鬱陶しい
どうにかこうにかならぬものか

かつて咲いてた花一輪
今はどこにもありません
子どもがちぎったか、自然に枯れたか
轉る口もなくなつた
無言で佇む残骸に
冷たい雨が降るばかり



「裂け目」

びりり。びりり
世界の裂ける音がする
びりり。びりり
だれかが思い切り力を込めて
びりり。びりり
世界をつまんだ手を引っ張っていて
びりり。びりり
世界の裂ける音がする
びりり。びりり
世界は今も裂け続けている

「見送る夜」

雨はとつくにあがってた
ビルの明かりのその向こう、弔いの炎が浮かんでいる
夜闇に閉ざされた山肌に赤々と明々と灯る火が
時間切れだと知らせている。
それを合図に帰りゆくはずの御霊たちは今どこだろう
肅々と帰り支度を始めるもの、まだ帰らぬと座りこむもの、
とつくの昔に帰路についたもの。
様々だろう、色々だろう。
それでも皆帰りゆく。

火が消える頃にはみな消えて、次の夏まであの世の暮らし。
それは誰でも変わらない。
誰でもいつかはそうなるのだから、
寂しがることはないのだと、
そう心に言い聞かせる、蒸し暑く物悲しい夏の一夜。



障害のある人の
権利を守る 北障連から
濱中博

第3号議案

2022年度活動方針計画

◇ 活動方針

1、障害児者の生活と権利を守り発展させる取り組みを進めます。←そのため学習をもとに取り組みを進めます。

2、京都北部地域の障害児者の運動を発展させていきます。←北障連の加盟団体・個人会員の拡大を図ります。・障害者団体と地域での取り組みや連携を進めます。・地域の暮らしや、福祉問題の学習と交流を進めます。

3、全国や京都の障害者団体などと連携した取り組みを進めます。←「障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会（障全協）」、「京都障害児者の生活と権利を守る連絡会（京障連）」等と連携した取り組みを進めます。

4、京都北部地域（京都府、二市二町）への要望書を作成し提出し、障害児者の向上為に活動を進めます。

5、次の世代に、北障連の活動・運動を引き継いでいく年度とするために、若い事務局の方たちと、丁寧に取り組みを進めていきます。

※再立ち上げに関わってきた代表・副代表をはじめとする

役員さんは、2013年6月の第一回会議より活動を続けて頂いています。休止していた北障連を立ち上げるのに約2年を費やして2014年度総会から再スタートしましたが、新しい世代と一緒に取り組みながら、北障連の新たな歴史を刻んでいきたいと思えます。

◇ 活動計画

活動の期間を総会から総会までの一年間とします。

年・月・日	取組内容
7月事務局会議	◇書面表決による 北障連総会
8月～10月	◇北障連統一要望書作成 ◇各市町での重点要望書作成←提出の取組
2023年1月～3月	北障連統一要望書回答

2月下旬

◇ 北障連学習会

※ 参加費・資料代の負担を頂きます。

5・6月

各市町の親の会総会

「京都障害児者の生活と権利を守る連絡会（京障連）」

総会



365歩のマーチ



※

30 お手伝い

家で母親が料理をするのに興味津々。「ゆいちくん、たまごサラダつくりたいんだよね。まねよーず(マヨネーズ)いれるんだよ」とやる気満々。ゆでたまごをゆでる前に、むきやすいようにこんこんとひびを入れます。もちろんゆいちくんもやりたがりですがいやな予感しかしません。母と一緒にこんこん…その目つきは真剣です。ひびを入れては、鍋に入れていきます。慣れてきた頃にぐしゃ！緊張の糸がぶつとぎれたように流しにたまごが飛びだします。もつたいないけど捨てようか、とゴミ箱に入ると「なんで捨てるの？」とゆいちくん。そうだね、食べ物はむだにしたらだめだね…。

その後はカレーづくり。鍋にカレー粉を入れ、計量カップに入れてもらった水を鍋にどぼどぼ。水を入れるのが楽しかったみたいで、「もつと入れる！」と主張しますが、「水の量は決まってるの！」と母親。なんだか納得してない表情でしたが、おいしいカレーをつくりたい、という思いがそうさせたのか、それ以上は水を入れようとはしませんでした。ゆいちくんもがんばってつくってくれたカレーをみんなでおいしく食べました。

8月に続いて、9月前半も風邪にかかったゆいちくん。一度風邪にかかると高熱が何日も続きます。土曜日から熱が出はじめ、日曜日には元気なものの、明日から保育園は難しいよなあ”という心配が的中。月曜日には、近所の病院で初のPCR検査をしましした。結果は陰性だったものの、熱が下がらずに保育園を休む日が続き、結果的には金曜日までお休みすることになりました。

「かあかとアイス屋さんしようと思つてたのに、なんでお仕事行つたの！」と泣き続け、つかれて寝る…という日が続きました。起きてからもすねて父とはあまり遊ばず、父「頭いたい？」ゆいち「ううん」父「ジュース飲む？」ゆいち「うん」と最小限のやりとり。帰ってくる母親を迎えに行きたいゆいちくん。「暗くなつたらね」と伝えると、14時頃からくもりの空を見て「くらくらなつてきた！」と急かされます。「もうちょっとね」のやりとりが4時間続きます。金曜日は母がお休みで父が出勤。別れに泣いてくれるかな、と思いつながら「とおとお仕事行つてくるよ」と言うテレビから目を離さず「ばいばい」。「さみしくないの？」に「ママがいるからさみしくない」と一言。父はさみしいです。

安藤 史郎(あかひつむす園)

知っ得情報

手帳無くても難聴児に補聴器購入補助

代表委員 松本 美津男

手帳交付の対象にならない難聴者に補聴器購入補助をする自治体が広がっています。

京都では残念ながら高齢難聴の人への購入補助を実施している自治体はありませんが、難聴児への購入補助は府下自治体のほとんどが実施しています。

自治体によって内容が異なりますので、代表例として京都市難聴児補聴器購入費助成事業を簡単に紹介します。

〈対象者〉

身体障害者手帳の交付対象とならない18歳未満の難聴児。

(難聴児又はその属する世帯の他の世帯員のうち、市町村民税の所得割の額が46万円以上の者がある場合には助成対象外)

〈内容〉

補聴器1個当たり4万円を上限として購入費用を助成。(両耳分が必要と認められる場合は2個まで助成)

※助成を受けて5年以内は、再度助成を受けることができない。

〈問合せ・申込先〉

子ども若者はぐくみ局子ども若者未来部子ども家庭支援課

TEL 746-7625 FAX 251-1133



あなたもぜひ 仲間に

サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に

京都市北区紫野東野町1-5
電話 075-432-3636

命の平等をかけた、 無差別平等の医療と 福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

ありがとうございます

年会費 柿並高光

分担金 京都府職員労働組合 (敬称略 2022.9.10)

稀代の社会運動家・井上吉郎さんを偲ぶ

鈴木勉(佛教大学名誉教授)

井上さんと親しく話すようになったのは今から19年前、私が京都に転勤してからになります。その翌年に引っ越した先が、井上さんと池添さんが住むマンションだったこともあり、双方の都合がつけば、夜は井上宅などでお酒を交えて過ごしました。井上さんの多彩な交友関係、京都市長選の立候補など豊富な運動経験や、幅広い分野の読書に裏打ちされた独自の視点から切り込む会話が面白く、時間を忘れるほどでした。

井上さんとはそれ以前にお会いしたことがあります。1990年代後半、各地の生協と共同作業所の事業提携に関する全国調査を実施した時、当時「京都府生協連」の専務だった井上さんがインタビューに応じてくれました。共同作業所を協同組合原理にもとづく組織と位置づける発言に共感したことを覚えています。

井上・池添夫妻が住むマンションに居を移してからの忘れられない思い出は、井上さんが脳梗塞を発症した日とその後の入院、そして退院後の活動にあります。

ある夜、井上・池添宅で飲んだ時のこと。嵐山へ行って私に見せたい所があると言われ、翌日早朝に嵐電の白梅町駅で待ち合わせました。前夜は私も井上さんも少々酒を過ぎたこともあって、重い頭を抱えて同行しました。嵐山に着いたものの井上さんは絶不調の様子、結局目的地には行かず帰宅しました。二日酔いだと思い、お互いゆっくり休みましょうと言って別れたのですが、その日に入院したと池添さんから聞き、二日酔いではなく脳内に異変が起きていたと知りました。

井上さんはその後1年2か月余、いくつかの病院に入院しました。岡山の大学病院に見舞いに行った時だと記憶していますが、片麻痺による不自由な口ぶりながら、自殺を凶ろうとしたことがあったと言われました。驚きのあまり、その場では自死を考えた理由や、それを止めたワケを聞きただせませんでした。

長い入院生活を終えて2007年11月、ようやく帰宅。外出時は車椅子を使い、嚥下障害のため胃瘻への栄養注入を受けながらも、好物を工夫して直接口にしていました。在宅サービスも利用して日常が戻り、退院の翌月から「WEB マガジン福祉広場」に「編集長の毒吐録」を連日掲載するようになりました。シャープな切り口で世相を斬り、「微力だが無力ではない」「死んでる暇なし」などの言葉が印象に残っています。

井上さんの行動で意表を突かれたのは、毎週1回の白梅町交差点での「無言宣伝」です。片麻痺の上、不自由な発声という制約がありながらも、「特定秘密保護法」成立への抗議行動を始めたことです。車いすに座って自筆のメッセージを膝の上に置いて、通行人に伝えるという行動です。参加者は徐々に増え、「無言ではいられない」と表現方法も増え、井上さん亡き後も継続しています。

私もかかわった「殺すな、殺されるな」の意見広告を各紙に掲載する運動では、当初は対象を国内紙しか考えていなかったのですが、井上さんがアメリカの有力紙も含めようと言われ、ニューヨークタイムズ紙にも掲載することになりました。たしか戦後70年の年でした。多くのカンパが集まり、呼びかけた人たちにはそれほどの負担にはなりません。さらに、「津久井やまゆり園」事件が起きた年の暮れに集会を開き、その後も毎年凶行が起きた日に、シンポジウムなどの企画を今でも継続しています。

井上さんの抵抗精神はもとより、抵抗方法のアイデアの豊かさと行動の持続性に感心します。かつて「国連・障害者の10年」最終年に、366日間の「マラソンスピーチ」を主導したのも井上さんだと知り、「稀代の社会運動家」という表題が浮かびました。